

## 弘前大学哲学会と私

齋藤俊哉

私が弘前大学哲学会と関わりを持ったのは、昭和29年のことである。當時は、学友会の哲学研究会と称していたが、前任の今井さんから会を引き継ぎ、穂本君と幹事として学友会に出席した。そこで、何か金になることはないかと、二人で「この会は研究会で、その成果を印刷して公にしたい」と大見得をきったところ、はからずも3000円の予算が認められた。しかし、その予算はコンパで直ちに消えうせてしまった。

学年末になると、印刷物と領収書を提出せよとのこと、二人で無い頭を絞り、原稿は忙しい先生方に無理を云ってお願いして書いていただき、我々も駄文を書き、ガリ版を穂本君のご親戚の小学校の先生に無理にお願いして中味は一応出来た。この雑誌のようなものにも題を付けようということになった。當時は東大からは「哲学雑誌」、他の大学からもそれぞれ哲学の研究誌が発行されていたので、それにあやかかって「哲学会誌」と名付け、表紙を印刷し製本してようやく期限に間に合わせて、面目を保った。さらに、図々しく「今泉本店」に頼み込んで店頭で数週間並べていただいたが、一冊も売れなかった。このようなわけで、世間は甘くないことと大きな事は言うものではないと、改めて思い知らされる結果となった。

卒業して数年後、齋藤武雄先生から、「君たちの作った「哲学会誌」と「弘前大学哲学会」の名称は非常によいので、それを引き継いで「弘前大学哲学会」を発足させるので、君も発起人と理事をやりなさい」とのお便りを頂き、悪いことをやった手前お引き受けして今日に至った。

その間、「弘前大学哲学会」に出席したかったが、高校の教員をやっていると、研究費はない、旅費がないで、ずっと欠席したままであった。

しかし数年後に、またも齋藤先生から「君も少しは研究をやったろうから、今度弘前大学を会場にして東北・北海道の哲学の先生にお集まり頂いて「東北哲学会」を開催するので、発表しなさい」とのお便りを頂き、条件はハイデッガーの研究で発表しなさいとのことで、本当に大変なことになってしまった。お断るわりする訳にもいかず、「ハイデッガーの良心」について発表したが、齋藤先生をはじめ、當時の諸先生方の顔に泥を塗る結果になってしまったことは、今でも申し訳ない気持ちで一杯である。今考えると、齋藤先生としては、この「東北哲学会」を存続させたかったと思われるが、そのお気持ちが私達弟子には通じなかったのではないかとと思われる。

それから何度か齋藤先生にお目に掛かる機会があり、いろいろと教えを請うことも多

かった。しかしその後、私の研究の中心は、道元の「正法眼藏」に移してしまったので、お会いするたびに残念そうなお顔をなさっていたのが、今でも忘れられない思いである。

私は、弘前大学哲学会は数年にして解消するだろうと考えていた。しかし、ここまで持ちこたえてきたのは、齋藤先生の生前のリーダーシップと亡き後の諸先生・諸先輩の変わらぬご努力、中でも川口光勇先生のご尽力には並々ならぬものがあり、その力があつたからこそ、ここまで続けられたものと感謝の念で一杯である。

私は、弘前大学哲学会に導かれ、教えを受けた結果、現在の私があると考えている。

本当に皆様ご苦勞さまでした、と心から感謝を申し上げ学会への最後の別れの言葉とします。

(昭和31年3月卒業)